



Title	工業集積地域における高校間格差と高校生の生活・意識：終章 高校生と親の生活・意識の諸特徴
Author(s)	小内, 透
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 16, 125-132
Issue Date	1998-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/22627
Type	departmental bulletin paper
File Information	16_P125-132.pdf



終章 高校生と親の生活・意識の諸特徴

以上、三つの高校を対象にして、学校「ランク」、階層、性別による違いに注目しながら、高校生と親の生活や意識の特徴を詳しく検討してきた。その結果、高校生と親の生活や意識には、学校「ランク」、階層、性別によって異なる側面と、共通した側面が存在することが明らかになった。そこで、それを、高校生と親の生活や意識の様々な領域に即して整理し、本報告のまとめとする。

I. まず、高校生の家庭の社会経済的背景は、明らかに学校ごとに大きく異なっていた。

親の階層はABC三校とも共通して自営業者層と安定的労働者層が多かった。しかし、その中で、A校に安定的経営・管理層や不安定経営・管理層、B校、C校に不安定労働者層が相対的に多く、とくにC校の男子にその傾向が顕著であった。その意味で、学校の「ランク」と階層的なヒエラルヒーは大まかに対応していた。

世帯年収を見ても、A校の子弟はBC校の子弟に比べ、経済的に恵まれている者が多く、同一階層であっても、A校生の世帯年収は他校の生徒よりも高くなる傾向があった。親の職業も学校ごとに偏りが見られ、同一階層であっても父母の職業は異なっていた。父親の場合、A校には管理職や医師・教員を始めとする専門職、逆にBC校ではブルーカラー、さらにC校女子には農業自営の者が相対的に多かった。母親の場合、いずれの学校でも、パートが主流であるが、A校では、BC校と比べ、パートが相対的に少なく、専業主婦と管理・専門職やホワイトカラーが多かった。とくに、医師の子弟は父母を含めてA校にしか存在しなかったし、教員の子弟もA校中心で、C校には一人も見られなかった。

また、単親や両親のない子弟も、A→B→C校になるに従って多くなっていた。しかも、親の学歴、とりわけ父親の学歴は、階層、世帯年収、職業以上に学校間の相違が明確であった。A校では大卒以上の父親が41.6%、B校では7%（男子生徒の父親）、10.5%（女子生徒の父親）、C校では男子生徒（1.4%）、女子生徒（3.1%）あわせて2名の大卒者がいるのみである。しかも、階層が同じであっても、学校が異なれば、親の学歴は大きく異なっていた。

このように、高校生の出身階層は学校ごとに異なり、家庭の社会経済的背景に関しても様々な点で学校ごとに大きな違いが見られた。

II. しかし、高校生の小中学校時代の生活や現在の生活に関しては、直接的には、階層差よりも学校差や性差あるいは世代に共通した特徴の方が強く見出された。

①高校生の小中学校時代の生活は主として現在の学校ごとに大きく異なっていた。小中学校時代の成績、役職経験、塾や習い事、中学校での楽しみや悩みに関して、A校生がもっとも学校に親和的な特徴を示し、B→C校生になるに従って、学校になじめなかった生徒が多くなる傾向が見出せた。とくに、A校生とC校生の間には大きな違いがあった。いかえれば、それは、小中学校時代に学校に親和的であった生徒が「ランク」の高い高校へ入っていることを示している。したがって、このことは、同じ階層の子どもであっても、学校への親和性の高さの違いによって、進学する高校が異なることを意味している。もちろん、「条件のよい」階層の子弟には小中学校時代に学校に親和的であった者が多いという傾向がある。しかし、「条件の悪い」階層の子弟であっても小中学校時代に学校に親和的であった者がいることも事実である。そのため、「条件の悪い」階層であっても「ランク」の高いA校へ進学する子弟もいるし、わずかではあるが、C校へ通う「条件のよい」階層の子弟も存在している。その意味で、小中学校時代の生活に関しては、直接的には、階層差よりも現在の高校の学校差の方が明確に現われていたといえる。⁽¹⁾

②これに対し、高校生の現在の日常生活には性差や学校差の大きい側面と世代的に共通する側面が見出された。

自由時間の過ごし方や文化行動のあり方を見ると、テレビ視聴や音楽鑑賞がすべての高校生に共通する世代的な「日常文化」として存在し、音楽の好みのジャンルにも世代的な共通性があった。しかし、テレビ視聴番組のように性差と学校差の結合した違いが見られる分野や、本の好みのジャンルのように性差の

みが特徴的な場合もあった。この結果は、文化行動が身体化された文化資本としてのハビトゥス⁽²⁾を基底にしていることを考えると、高校生のハビトゥスには階層的な違いがそれほど見られないことを意味している。もちろん、それは、家庭や親自体に階層的なハビトゥスの違いが存在しないことを示すものではない。実際、家庭で購読している新聞や本の数には、一定の階層差が見られた。しかし、子どもたちの新聞の購読時間や購読欄、本の好みのジャンルなどに階層差は見出せなかった。その意味で、こうした事実は、家庭や親に階層的なハビトゥスがあったとしても、それが子どもたちにスムーズに「相続」されていないことを物語っている。

自由時間の過ごし方には、学校差も見られた。「勉強」も「部活動」も重視するA校生、「部活動」に重点をおくB校生、どちらもそれほど重視しないC校生という日常生活パターンの学校差が存在した。このうち、C校生の場合、女子を中心としてアルバイトにいそしむ姿が見出せた。それは、進学校かそうでないかという学校がおかれた社会的位置や、何に高校生活の重点をおいているのかという学校の方針の違いにもとづいて生じたものであるといえる。

③学校生活そのものの場合、さらに学校間の違いが大きくなっていた。もちろん、すべての学校の生徒が共通して「友人づきあい」、「部活動」、「休み時間」を学校での楽しみであるとし、意外なことに、どの学校でも3割を超える生徒が中退したいと考えたことがあった。しかし、中退したいと思うきっかけは、学校ごとに異なっていた。進学校であるA校の場合、勉強の厳しさに耐えかねて中退を考える者が多かったのに対し、B校生には、友達関係、バイトのしすぎ、部活等々を中退を考えるきっかけとしてあげる者が多かった。さらに、「底辺校」であるC校の場合、学校生活に対する無意味感と「問題行動」が中退を考えるきっかけとされ、実際に中退する者も多かった。また、基本的なルールに従った学校生活、学校での悩み、悩みの相談相手などの点にも、大きな違いが見出せた。A校生には基本的なルールに従った学校生活を送る者、「成績」と「進路」に関する悩みをもつ者が多く、学校外の友人に学校生活の悩みを相談する者が少なかった。それがB校生→C校生になるに従って、基本的なルールに従った学校生活を送る者が少なくなり、学校生活の悩みも「進路」に特化し、学校外への友人に相談する者が増加していた。明らかに、学校との関わりに重きをおく傾向がA→B→C校の順に弱くなっていた。しかも、そこで重要なことは、学校への関わり方の違いが意識的な態度の違いではなく、無意識的ないわば学校に順応的であるかどうかといった、ハビトゥスの違いによって生み出されていることであった。それは、A校生の場合、学校に親和的であった小中学校時代の経験によって身体化されたものであることが予測できる。

④しかも、学校とは直接関係がなく階層的な影響が強いと思われる家庭生活の場でも、学校差・性差や世代的に共通した側面が見られた。

もちろん、高校生の家族生活の中には、親の階層のあり方によって異なる側面もあった。階層による相違がもっとも明確に現れていたのは、家の手伝いのあり方であった。実際、安定した階層であればあるほど、その子どもは家の手伝いをしなくなるという傾向が見られた。また、表面的には、学校、男女、階層の違いなく、すべての高校生に共通する特徴を示していた家庭の悩みにも、面接調査の結果をふまえると、階層的な違いによって刻印された特徴が見出された。それは、とくにC校の自営業ないし不安定労働者層の女子に、父母の態度に深く結びついた、深刻な家庭の悩みをもつ者が多い点に端的に示されていた。

しかし、日常的な家庭生活においてもっとも重要な親子のコミュニケーションに関しては、どの高校生の場合にも、共通して父親より母親とのコミュニケーションの方が密であり、コミュニケーションに関する親子間の認識のギャップという点もすべての高校生に共通していた。しかも、男子の方が女子よりもコミュニケーションが希薄で、とくにC校男子の母親とのコミュニケーションにその傾向が強く現われていた。したがって、そこでは、社会的経済的に異なる特徴をもつ家庭の中にも、世代的な特徴や学校・性の違いの影響が意外なほど大きく存在することが明らかになった。

Ⅲ. 同様に、親の教育意識に関しても、階層の違いより、子どもの通う学校や性による違いの方が大きかった。

①たしかに、高校生にふさわしい生活として、多くの父母が「勉強に打ち込む」、「友人づきあいを大

切に」、「自分の将来を考える」を共通してあげていた。しかし、「スポーツに励む」や「勉強に打ち込む」という点に関しては、父母ともに子どもの通う学校による違いが明確であった。A校生を子どもにもつ父母は、その過半数が「スポーツに励む」ことを高校生にふさわしい生活と考えているのに対し、C校生の親にはこのような考え方をもち者は必ずしも多くなかった。また、「勉強に打ち込む」ことが高校生にふさわしいとする親の考え方はA校→B校→C校になるに従って、確実に弱くなっていた。同時に、「家の手伝いをする」生活が高校生にふさわしいとする親は、学校の違いにかかわらず、父親よりも母親、また子どもが男子ではなく、女子である方が確実に多かった。つまり、高校生にふさわしい生活として「家の手伝いをする」という行動様式に対する期待には、期待する主体である親と期待される客体である子どもの双方に性による違いが見出せたのである。したがって、高校生にふさわしい生活に関する親の意識は、階層的な差異ではなく、むしろ学校差や親子の二重の性差によって大きく規定されていることが明らかになる。

②高校生の生活のうち学校生活で大切なことに関する考え方の場合、「友だちが多いこと」、「授業をまじめに聴くこと」、「学校の規則を守ること」、「学校行事への参加」をあげる親が多く、「先生に認められること」、「生徒に認められること」をあげる親が少ないという共通点が見られた。しかし、それでも、母親の方が父親より学校への順応性を重視する志向性が強く、A校生の父母だけに「成績が良いこと」をあげる者が比較的多かった。明らかに親の階層よりも、子どもの通う学校や父母の間での考え方の相違の方が大きな意味をもっていた。ただし、学校生活で大切なことに関しては、子どもが男であるか女であるかはそれほど大きな違いをもたらしてはいなかった。家庭生活における手伝いが女子にふさわしいとしていたのとは、対照的である。このことは、高校生活の過ごし方に関して、家庭生活では子どもの性が大きな意味を持つのに対し、学校生活では子どもの性の違いはあまり意味をもたないことを浮き彫りにしている。したがって、学校生活で大切なことについての親の考え方は、階層差ではなく、父親と母親による違いと進学校であるかどうかといった学校の違いに大きく左右されていたことが明確となる。

③さらに、子どもを今の学校に通わせている理由になると、階層による違いとともに、性による違いは親子ともに見られなくなり、学校による違いが主となる。実際、A校の場合、父母ともに「進学に有利だから」、B校では父母ともに男女の別なく「社会で必要な知識が学べるから」、「就職に有利だから」、C校も父母ともに男女の別なく「社会で必要な知識が学べるから」、「高校くらいは出た方がよいから」が主要なものになっていた。これは、いうまでもなく子どもたちのおかれた現実に合わせて語られた言説以外のなにものでもない。C校生の親の場合、「高校くらいは出た方がよいから」子どもをC校に通わせているのではなく、成績によって格差づけられた学校システムの中で、子どもがC校に入ったがゆえに、このように答えているのであり、他の親の説明も同様に事後的に作り上げられたものに他ならない。いいかえれば、ここで述べられた理由は、メリトクラティックな振り分けの合理化や正当化の仕方の違いを示していると考えた方が現実的である。その意味で、ここで示された結果は、階層や親子の性に関わりなく、学校の違いによってメリトクラティックな選抜の合理化・正当化の仕方に違いがあるということを物語っているといえる。

IV. ただし、将来に関する志向性になると、高校生の場合も親の場合も、子どもの通う学校や性による違いだけでなく、階層による違いが見出された。

①高校生の進路についての考え方は、当然のことながら、学校や性によって異なっていた。A校生はほぼ全員が国公立大学を中心とした4年制大学への進学を希望しているのに対し、B校生、C校生の場合、進学希望者は半減する。しかも、B校生、C校生の場合、男女とも専門学校が進学希望先の約半数を占め、女子生徒には短大希望者も少なからず存在していた。また、B校男子とC校男女のそれぞれ2割が進路未定であった。

高校生の進路希望に関しては階層差も見られた。男子の場合、安定的経営・管理層、不安定経営・管理層→自営業層、安定的労働者層→不安定労働者層の順に確実に進学希望者が低下し、進学者の中でも専門学校を希望する者の割合が高まっていた。女子の場合にも、進学校の生徒がいなくてもかかわらず、安定

的経営・管理層の子弟に進学希望者が相対的に多く見られた。ただし、学校ごとに階層のもつ規定性は異なり、A校では階層の如何にかかわらず、進路希望先はほとんど変わらないのに対し、C校では男子生徒に見られた全体的な階層差が学校内においても見出せた。その意味で、もともとトラッキング・システム化された学校への振り分けに階層的な偏りが見られる中で、進学校へ入った者の場合、進路に関して階層的な制約が生じないが、「底辺校」へ入った者の場合、階層的な制約を免れないことを物語っている。

②高校生の職業志向を見ても、学校や性による違いと同時に、階層による差異も見出された。たしかに、男子の場合、6～7割の生徒が「就きたい職業がある」としている点では学校差は見られない。しかし、希望する職業の内容には学校差が見られた。A校生が教師、医師、技術者・研究者を希望しているのに対し、B校生はA校生とはまったく異なり、公務員、情報関係、商業・サービス業となる。C校生になると、希望が明確なのは公務員しかない。一方、女子の場合、男子と異なり、B校生、C校生とも、8割以上の生徒に「就きたい職業」があり、その内容も医療・福祉関係、理容師・美容師関係が共通して多くなる。しかし、B校女子では事務や商業・サービス関係、C校女子では保母、マスコミ関係、ゲーム関係といった点で志望の違いが見出せる。そのうえ、男子の場合、職業志向に階層差が見られ、安定的経営・管理層、不安定経営・管理層→自営業層、安定的労働者層→不安定労働者層の順に「就きたい職業がある」とする者の割合が増大していた。それは、進学希望者や専門学校希望者の階層差と結びついていることを意味している。

③子どもの将来に対する親の考え方にも、学校差、性差とともに階層差が見出された。親の学歴期待は、いずれの学校でも、女の子よりも男の子の方が高く、男女ともA校→B校→C校になるに従って、確実に低下していた。それは、父母間でほぼ同一の傾向を示していた。男子の場合、大学以上の学歴を望む親は、A校で9割、B校で5割、C校で2割、女子の場合、短大以上の学歴を望む親は、B校で4割弱、C校で2割程度となっている。A校の場合、この中に大学院まで望む親が2割含まれている。同時に、親の学歴期待には階層的な差異も見られた。男子の場合、父母ともに安定的経営・管理層→不安定経営・管理層→安定的労働者層・自営業層→不安定労働者層の順に学歴期待の水準が低下し、女子の場合にもほぼ同様な傾向が見出せた。したがって、学校ごとに階層の偏りがあることを考えると、親の学歴期待の学校差の背後には、学歴期待の階層差が潜んでいることが明らかになる。

ただし、学歴期待の階層間格差は、学校間格差よりも小さく、同一階層であっても、子どもの通う学校によって親の学歴期待は異なっていた。事実、A校生の親の場合、大学以上の学歴期待はいずれの階層においても、各階層内の最高水準を示していた。そのため、こうした事実は、学歴期待の学校差の背後に、異なる学歴期待をもつ諸階層の子弟が学校ごとに偏った形で通っているという現実をむしろ見えにくくする役割を果たしていると考えられる。

④これに対し、親の職業期待の場合、父母の間に少なからぬ相違が見られた。たしかに、父母ともに、学校別に見ると、公務事務（男女）や一般事務（女）、階層別に見ると、公務事務（男女）、一般事務（女）、教員（男）を子どもに期待する者が多く、この点では違いは見られなかった。しかし、父親の場合、C校男子や自営業層の男女に対して商業・サービス業自営を期待する以外はすべてホワイトカラーの職業を期待していたが、母親の場合には、保安職（B校男子・C校男子）、商業・サービス業自営（C校男子、不安定経営・管理層女子、自営業層女子）、保母（C校女子、不安定経営・管理層女子）、看護婦（C校女子、不安定経営・管理層女子、不安定労働者層女子）、美容師・理容師（C校女子、不安定経営・管理層女子、自営業層女子）といったホワイトカラー以外の職業を期待することも珍しくなかった。いかにいけば、父親が主としてホワイトカラーの枠内で学校間、男女間、階層間に異なる職業期待を示していたのに対し、母親の場合、むしろホワイトカラーの枠を超えた形で学校間、男女間、階層間に異なる多様な職業期待をもっていたということである。したがって、親の職業期待は、父母の違いとクロスする形で、学校間、男女間、階層間の違いが生み出されていたといえる。

しかし、父母ともに、すべての階層に見られた男子に対する教員への期待が、学校別に見ると、A校だけにしか見られなくなっていた。それは、階層の如何にかかわらず、多くの父母が男子に対して教員にな

ることを期待しているにもかかわらず、子どもの通う学校によって、その実現可能性が異なることにもとづいていると考えられる。このことは、いずれの階層においても、学校のもつ規定性が強いことを示している。その意味で、それが、親の職業期待の場合にも、学歴期待と同様、学校差の背後にある階層差を見えにくくする役割を果たしていることが明らかになる。

⑤しかも、学歴期待や職業期待には、学校差によって見えにくくなっている階層差だけでなく、学校差には解消されない、より明示的で直接的な階層差も存在していた。

実際、同一学校内においても、階層的に異なる親の学歴期待が把握できた。それは、男子の場合、A校生の親の大学院進学に対する期待に端的に示され、女子の場合、B校、C校の高等教育進学への期待に明確に現れていた。同じA校生の親であっても、条件の良い階層の親は、より多くの者が大学院進学を期待し、同じB、C校の女子生徒の親であっても、条件の良い階層の親には、高等教育進学を娘に期待する者が多かった。したがって、ここで見られた階層差は、同一学校内における階層のヒエラルヒーに対応したものであった。いいかれば、男女とも、低い学歴や一般的な学歴ではなく、より高い学歴期待に注目すると、同一学校内に明確な階層差が浮かび上がるということである。

一方、職業期待の場合、A校生の父親の間に、明らかな階層差が見出された。同一の学校に息子を通わせているにもかかわらず、条件の良い階層の親になればなるほど、息子に管理職を期待する者が多くなり、逆に、条件の良くない階層の親ほど、公務事務を期待する者が多かった。B校生、C校生の親の場合、一般的な意味で「条件がよく」、「安定している」とされる職業を選択する余地が少ないのに対し、A校生の親は、その選択の幅が大きいため、それに対応して、階層差が浮かび上がってくるのかもしれない。いずれにしても、親の学歴期待や職業期待には、学校差に解消しきれない明確な階層差も存在しているのである。

V. このように見てくると、高校生や親の生活・意識は、一定の共通性はあるものの、様々な側面で、学校の「ランク」、性別、出身階層などによって、大きく異なっていることが浮き彫りになる。しかも、そうした高校生や親の生活・意識の違いが生み出されるメカニズムは、けっして単純なものではなく、学校差、本人と父母の性差、階層差が複雑に絡み合っていた。単一の原理によって、彼らの生活や意識の違いを説明することは不可能であった。

そのなかで、もっとも幅広い側面で、高校生や親の生活・意識の違いを生み出す原理になっていたのは、高校の「ランク」の違いであった。高校の「ランク」の違いは、学校生活だけでなく、日常生活・家族生活、親の学校観、親子の将来志向といった、現在と未来にわたる様々な領域において、高校生や親の生活・意識の違いをもたらしていた。したがって、この点で、どの「ランク」の高校に入るのかが、きわめて重要な意味をもっていることが改めて確認できる。

しかし、親も含めた性の違いによって高校生や親の生活・意識の違いがもたらされている側面も、少なからず見られた。それは、日常生活、家族生活、親の学校観、親子の将来志向の諸領域に及んでいた。したがって、学校「ランク」の違いだけで、高校生や親の生活・意識の違いを説明することは、必ずしも十分ではないことがわかる。だが、性による違いが見出される領域は、多くの場合、学校差と結びついていたことも事実である。男女による違いがあっても、同性の中では、高校の「ランク」の違いによって、異なる特質が見出された。また、親子の将来志向に見られたように、性の違いが階層差と結びついている場合もあった。

さらに、高校生の出身階層の場合、家族生活の一部を除いて、おもに社会経済的背景と将来志向に影響を与えているにすぎなかった。出身階層の持つ意味は、主として高校の「ランク」に対応した出身階層の偏りをもたらす高校への進学ないし選抜の時点と、高校卒業後の親子の将来志向に集中的限定的に現われ、現在の生活のあり方それ自体には、ほとんど直接的な影響をもたらしていなかった。しかも、高校卒業後の親子の将来志向に関しては、すべての学校や将来志向の全般にわたって階層差が見られるのではなく、特定の高校内に限って階層差が見られるか、特定の学歴や職業に対する期待をめぐって親の階層差が意味をもつ程度に限定されていた。

したがって、こうした現実をふまえると、高校システムは、階級・階層構造の再編に対して、重層的な意味をもっていることが浮き彫りになる。

第一に、高校システムは、表面的には階層的規定性の乗り越えという機能を果たしているとみなすことができる。実際、進学校には、相対的に少ないものの、低い階層の子弟も入学しており、進学校に入れば、たとえ低い階層の子弟であっても、将来の志向性は階層的な規定性を乗り越え、大きくいえば、進学校に特有の傾向を示すようになる。少なくとも、今回の分析の結果からは、進学校の生徒の間に、現在の生活の過ごし方や大学進学を前提にした将来志向という点で階層的差異は見出せなかった。その意味で、ブルデューが指摘したような、高い階層の子弟の多い進学校で学ぶ低い階層の子弟に、階層的な背景から生じるジレンマは、明確には把握できなかつた。⁽³⁾ いかえれば、序列化された社会的選抜システムとしての高校システムは、階級・階層構造の世代的再生産ではなく、メリトクラティックな社会的選抜を介した階級・階層構造の社会的再生産をもたらす機能を果たしているといえる。

しかし、第二に、高校システムは、構造的には傾向的な階層差を温存していることも事実である。それは、主として高校入学時の選抜結果に階層的な偏りが見られ、学校間格差によって将来志向に大きな違いが生ずる点に集中的に現れている。高い階層の子弟が多く入学する進学校は、高い階層につながる学歴志向や職業志向を親子ともに強化し、低い階層の子弟が多く入学する「底辺校」は、親子の学歴志向や職業志向を低いものにする。それは、親子の将来志向の学校間格差の背後に、階層間格差が横たわっていることを意味している。しかも、学校差に解消できない階層差も、限定された形で存在していた。実際、わずかに存在した「底辺校」の高い階層の子弟の場合、実現可能性は別にして、少なくとも志向性としては、低い階層の子弟とは異なる傾向を示していた。さらに、親の息子に対する学歴期待には、より高い学歴を獲得させる点で、同じ進学校においても階層差がみられ、娘の場合にも、基本的に同様の傾向が見られた。したがって、メリトクラティックな高校システムであっても、階層のもつ制約性を、完全に無意味化するまでには至っていないと考えられる。

しかも、第三に、高校システムが温存する階層差は、性という属性による差異を内包した形で存在していた。実際、性の違いは、学校生活を除く現在の生活や将来志向の違いを生み出す役割を果たしていた。それは、学校差と結びつく場合が多かったが、階層差と結びつくこともあった。そもそも、高校システムが構造的に傾向的な階層差を温存しているため、学校差と結びつく性差は、結果として階層と間接的に連関するものとなる。しかも、親子の将来志向の性差のように、階層差と不可分に結びついている場合もあった。その意味で、高校システムが温存する階層差は、一定の性差をともなっていると見なす必要があろう。

こうして、トラッキング・システム化した高校システムは、性差を含んだ傾向的な形での世代的再生産を随伴する、階層構造の社会的再生産の機能を果たしていることが明らかになる。その意味で、高校システムが性差を含んだ傾向的な世代的再生産を消滅させることができず、むしろ温存させる機能を果たしているとみなすことができる。

その場合、こうした機能は、親子のメリトクラティックな見方によって支えられていることも忘れてはならない。もちろん、それは、学校だけでなく、社会生活全体を通じて形成される社会観に基づいている。実際、親子ともトラッキング・システム化された高校システムの中で、階層的に偏った形で選抜された結果を本人の「やる気」にもとづくものとしてとらえ、子どもたちが現在通う学校に合わせた形で学校生活の過ごし方や子弟の将来の期待を考えるようになっていた。そのため、このことは、彼らが社会的選抜の階層的な偏りや高校システムのトラッキング・システム化を社会的な問題として把握する視点をもちえなくすることを意味している。そこでは、たとえ、子どもが「底辺校」へ入り、それゆえに将来の進路が限定されたとしても、それは本人の「やる気」にもとづく結果として受け入れざるをえないものとして把握されることになる。その意味で、トラッキング・システム化された高校システムと階層的に偏りのある振り分けは、親子のメリトクラティックな学校観・社会観によって合理化されているといえる。

また、傾向的な世代的再生産をともなつた社会的再生産に性差が内包されている点も、親子の社会観に

よって支えられている。それは、親子とも、根強い性別分業観をもっていたことに端的に示されている。親子の根強い性別分業観があるからこそ、階層差と結びついた将来志向の男女差が生じるのである。逆にいえば、階層差と結びついた男女差が生じても、根強い性別分業観がある限り、それだけではそれほど大きな問題になりえないということである。

しかも、トラッキング・システム化された高校システム自体は、親子のメリトクラティックな学校観・社会観に支えられているだけでなく、それを増幅させる役割をも果たしている。それは、子どもたちが現在通う学校に合わせた形で学校生活の過ごし方や子弟の将来の期待を考えざるをえない現状のもとで、ある程度決まってしまう「学歴」ではなく、「個人の努力」と「個人の才能」が社会で成功する要因であるとする社会観をもつようになってきていることに端的に示されていた。メリトクラティックな見方からいえば、本人の「やる気」の帰結として受け入れざるをえない現実があっても、あるいはそれだからこそ、将来の成功は現状だけでは決まらず、「個人の努力」や「個人の才能」によって手に入れることができる、さらに強化されたメリトクラティックな考え方が浮上してくるのである。そこには、トラッキング・システム化された高校システムの機能として、親子のメリトクラティックな学校観・社会観を増幅させる働きが明らかに存在している。

それゆえ、ここから、高校システムはトラッキング・システム化された自らのあり方と、それを通じた性差を含んだ傾向的な形での世代的再生産を随伴する階層構造の社会的再生産を、正当化する機能をも果たしていることが明らかになる。

以上のように、現代日本の高校システムは、性差を含む傾向的な形での世代的再生産を随伴した、階級・階層構造の社会的再生産とそれを合理化する正当化機能をもっていることが浮き彫りになった。しかし、これはあくまでもわが国が世界的に高い経済水準に到達した段階で生み出されている現実であるという点も忘れてはならない。格差のある階級・階層構造が世代的再生産を伴った形で社会的に再生産され、それに性差が含まれていたとしても、経済的にボトムアップされた（あるいはそう認識された）状況のもとでは、低い階層的立場におかれても、日々の経済的な暮らしに大きな困難が生じにくくなるため、世代的再生産も社会的再生産もそれほど大きな問題として把握されなくなっていると考えられるからである。逆にいえば、わが国の経済的なパフォーマンスが崩れ、経済的なボトムダウンが生じたり、生活困難層が増大する形で階層間格差が拡大すれば、事態は大きく変わる可能性をはらんでいる。大競争（メガコンペティション）時代が叫ばれ、規制緩和が時代の合い言葉になっている現状が続けば、事態の変化が確実に進んでいくことは明らかである。すでに、大企業のリストラ、都市銀行や大手証券会社の倒産が相継ぎ、「大失業時代」の到来が懸念されている。

したがって、経済的に高いパフォーマンスを達成したにもかかわらず、あるいはそれゆえに、性差を含んだ傾向的な世代的再生産を伴う社会的再生産のメカニズムが存在しているということ自体の持つ意味を捉え直す必要がある。なぜなら、こうした現実には世代的再生産を伴う社会的再生産がきわめて根深い社会的メカニズムであることを物語っているからであり、経済的なボトムダウンや階層間格差の拡大という新しい事態が生じた時、大きな社会問題として浮上する可能性をはらんでいるからである。

[注]

(1)もちろん、これは、トラッキング・システムの上中下に位置する高校に通う学生から見た特徴である。しかし、高校の「ランク」と階層間格差は、傾向的に相即していることも事実であった。そのため、階層的な視点から小中学生の生活の特質を見なければ、高校の学校間格差と階層との関係が生じるメカニズムは十全な形では明らかにしえないといえる。この点については、この報告書の姉妹編にあたる『調査と社会理論・研究報告書』17、北海道大学教育学部教育社会学研究室、1998年で、その一端を検討しているので、参照されたい。

(2) Bourdieu, P., *La Distinction: Critique sociale du jugement* (Paris, Éditions de Minuit) 1979. 石井洋二

郎訳『ディスタクシオン I』新評論、1989年、石井洋二郎訳『ディスタクシオン II』藤原書店、1990年。

(3) Bourdieu, P. et Passeron, J.C., *Les héritiers: les étudiants et la culture* (Paris, Éditions de Minuit) 1964. 石井洋二郎監訳『遺産相続者たち』藤原書店、1997年。